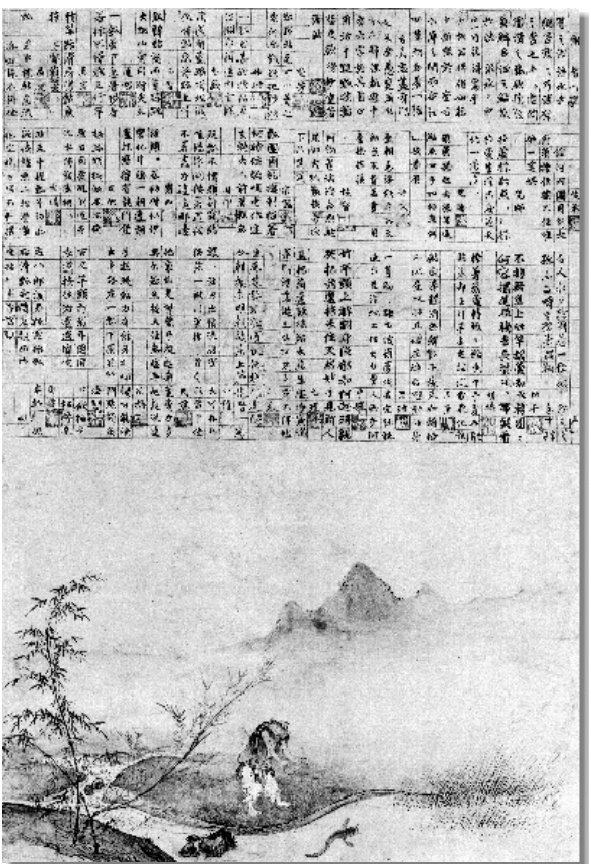


瓢鮎図の謎 禅文化の精神

芳澤勝弘 2005/10/21 於福井工業大学



画と詩の関係 「無声詩・有声画」

絵は声のない詩、詩は声のある絵

黄庭堅「次韻子瞻子由題憩寂園」二首の一に「淡墨写出無声詩」。
蘇東坡「和文与可洋川園池」三十首の「溪光亭」に「溪光自古無人画、憑仗新詩与写成」。施元之注に「古詩話」に「詩人、画を以て無声詩と為し、詩を有声画と為す」。

★画賛を読み解くためのキーワード

◎「鮎魚上竹竿」

『帰田録』

梅聖俞、詩を以て名を知らる。三十年、終に一館職をも得ず。晩年、唐書を修するに与(あず)かる。……其の初め、勅を受けて唐書を修す。其の妻の刁(ちよう)氏に語って曰く、「吾れ書を修するは、(獼猴、布袋に入る)と謂つつ可し」。刁氏、对(こた)えて曰く、「君の仕官に於けるや、何ぞ(鮎魚、竹竿に上る)に異らん」。

両義性(登れる・登れない)

- ①ナマズは竹を登ることができない
 - ②ナマズは竹を登るが、いつになるか分からぬ
 - ③ハヤブサも追いつけぬスピードで登る。
- 鮎魚上竹竿、俊鶡趕不及

詩四 (鄂隱) 慧巖

葫蘆葫蘆、縮項坦腹 (葫蘆、葫蘆、縮項にして坦腹)

擬得鮎魚、待跳上竹 (鮎魚を得んと擬せば、竹に跳び上るを待て)

【訳】(瓢箪は)コロコロ、(鮎は)短首で太腹。

鮎をつかまえるなら、(鮎が)竹に跳び上がるのを待て。

詩六 (惟忠) 通恕

若捺不得、飛上竹竿 (若し捺え得ずんば、竹竿に飛上せん)

【訳】おさえ込めないとわかったならば、(その時)鮎は竹竿に飛び上がっているであろう。

詩七 (太白) 真玄

竹竿路滑、焉得鮎魚 (竹竿路滑なり、焉んぞ鮎魚を得んや)

【訳】竹はツルツル(鮎が登れるわけがない)、(鮎はヌルヌル、瓢箪で)抑えられるわけがない。

詩二一 (聖徒) 明麟

飄然却上竹竿去 (飄然として却って竹竿に上り去って)

定鼓風雷飛化龍 (定めて風雷を鼓して飛んで龍と化せん)

【訳】(鮎は)竹に登って、きつと風雷を轟かせて龍と化すだろう。

詩二四 (独鼎) 中拳

竹竿頭上解翻身 (竹竿頭上、身を翻すことを解くす)

俊鶡如何趁得親 (俊鶡も如何か趁い得て親づかん)

★概略

大相公(足利義持)の命によって、大巧如拙(生没年不詳)が描いたもの。これに、当時の五山の禅僧三十一人が賛詩をつけている。応永年間(一四〇〇年ころ)に制作された。如拙の下には周文が、その下には雪舟が輩出したため、美術史においては、わが国の水墨画の歴史のなかで、「記念的作品」とされ、重要視されている。

如拙 周文 雪舟

★「五山文学」の時代

詩文至上主義。その功罪。日本文化の創出。

★従来の解釈

「禪の公案をテーマにしたもの」。

★最近の解釈

大西廣「瓢鮎図と瓢箪の呪術性」

「三十一人のお坊さんの賛を通読」して分かることは「禪の教訓どころか……一場の馬鹿騒ぎが演じられて」いることであり、そのテーマは「瓢箪の怪異、瓢箪の魔力」。

島尾新『瓢鮎図―ひょうたんなまズのイコノロジー』(平凡社)

「これが禪の公案であるとは思えない」「ひょうたんだなまズをおさえる」から宗教的な意味を引き出せるのだろうか」。

飯島吉晴『一つ目小僧と瓢箪 性と犠牲のフォークロア』(新曜社)

「如拙の〈瓢鮎図〉をはじめ、大津絵の〈瓢箪鮎〉、歌舞伎の所作事の〈瓢箪鮎〉や安政二年の大地震直後の〈鮎絵〉などに、瓢箪で鮎(水神)をおさえる構図をみることができる」。

吉野裕子「如拙筆『瓢鮎図』の推理」(琵琶湖博物館)

男は足利義満、ナマズは北条義嗣、瓢箪は天、竹は後小松天皇といった具合で、この絵の意味するところは、挫折した義満の皇位簞奪の野望を皮肉り嘲笑したものだ、という。

【訳】（登れぬ筈の）鮎が、百尺竿頭のてっぺんでトンボを切る。（竹竿を登る早さには）ハヤブサも追いつけぬ。

◎「水上捺葫蘆」

水中で瓢箪をおさえつけても意のままにならないように、とらわれず転々自在なこと。

「心のありよう」になぞらえる。

『碧巖録』四十三則、本則評唱に「巖頭道わく、水上の葫蘆子の如くに相い似たり、捺著すれば便ち転ず」

詩八 (□□) 昌慶

瓢上塗油、捺鮎急流 (瓢上に油を塗り、鮎を急流に捺す)

捺来捺去、捺不得休 (捺え来たり捺え去り、捺え得ずして休す)

【訳】瓢箪に油を塗ってツルツルにして、それでもって、急流に泳ぐ鮎を抑える。あつちから抑え、こつちへと抑える。(結局)抑えられぬと分かったところで(求める心は)止む。

詩九 (西胤) 俊承

按鮎何所図、用箇大葫蘆

(鮎を按うるに、何の所図ぞ、箇の大葫蘆を用う)

【訳】鮎を抑えるのに、何のつもりで大瓢箪を使うのか。

★「禅は仏心宗」「覓心不可得」

達磨と二祖慧可(神光)の問答(『伝灯録』卷三、達磨章)。

光曰く、諸仏の法印、聞くことを得べけんや。

師曰く、諸仏の法印は人より得るに匪ず。

光曰く、我が心未だ寧からず、乞う師、与に安んぜよ。

師曰く、心を將ち来たれ、汝が与に安んぜん(将心来与汝安)。

曰く、心を覓むるに了に得可からず(覓心了不可得)。

師曰く、我れ汝が与に心を安んじ竟んぬ(我与汝安心竟)。

この問答によって、二祖慧可は達磨から付法される。すなわち、これが禅宗の始まりとなる。以降、禅宗においては常にこの心が問題となる。

禅は仏の心印を直伝する宗旨であるゆえに仏心宗といわれる。「禅とは心の名なり、心とは禅の体なり」ともいわれる。禅のテーマはつねに心である。

「瓢鮎図」のテーマは何か。心である。とらえがたい心(鮎)を、とらえがたい心(瓢箪)でとらえるということである。



★手の描かれ方

①「瓢箪を持っている」ところを描いたのだが、うまく表現できなかった。

②「瓢箪を持っているのではない」ことを表現しようとした

★水墨画の山水は何か

小林秀雄「私の人生観」

山水は徒らに外部に存するのではない、寧ろ山水は胸中にあるのだ、という確信がもし彼等になかったら、何事も起り得なかったというところが肝要なのである。彼等には画筆とともに禅家の観法の工夫があった。

画筆をとって写す事の出来る自然というモデルが眼前にチラチラしているなどという事は何事でもない。

自然観とは真如観ということである。真如という言葉は、かくの如く在るという意味です。

何とも名附けようのないかくの如く在るものが、われわれを取巻いている。われわれの皮膚に触れ、われわれに血を通わせてくるほど、しつくり取巻いているのであって、どこそこの山が見えたり、どこそこの川を眺めるというようなことではない。

★「胸中の山水」

蘇東坡詩(郷里を思う気持ち)

頼我胸中有佳處(頼いに我が胸中に佳處有り)

一樽時對畫圖開(一樽、時に画図に対して開く)

與可畫竹時、胸中有成竹(与可、竹を画く時、胸中に成竹有り)

★「心」とは何か

『猿法語』(宝暦年中刊)

一心といふは、人ばかり一心にてはなし。元来、天地も草木も、雨も雲雷も、地水火風も、人間畜生、天上地獄、ありとあらゆる、皆、一心性なり。

★「瓢鮎図」画賛の意味

禅僧たちの言葉遊びによる「馬鹿騒ぎ」ではない。また新しい表現様式(新様)を目的とした実験的絵画というのでもない。ましてや呪術や、政治批判を表現したものではない。

禅の根本的な世界観を絵画と詩で表現したものに他ならない。心のありさま、法性を、瓢箪とナマズという象徴、および山水画であらわした、画期的なもの。

このような、禅の発想から出る「禅画」は江戸中期の白隠慧鶴によって、いっそう多彩に表現されるようになる。

【参考】

芳澤勝弘『瓢鮎図・再考』

http://iriz.hanazono.ac.jp/framek_room_f3.html

芳澤勝弘『白隠—禅画の世界』(中公新書)